

○結果分析及び今後の各学校に求められる対応

1. 不登校及び不登校傾向を示す要因

- ・小学校、中学校とも「人間関係がうまく構築できない」という回答が最も多い。
- ・続いて、「家庭の教育力の低下」を挙げている。
- ・その他の要因として挙げられているものは、小学校では、「母子分離不安」や「発達障害が疑われる」、「学業不振」、「病気による」などの回答があった。中学校では、「学業不振」や「発達障害の疑い」が目立つ。
- ・その他にも、不登校及び不登校傾向を示す要因は様々なものがある。

2. 不登校及び不登校傾向を示す児童生徒への対応

- ・電話連絡、家庭訪問はほとんどの学校で実施している。
- ・ほとんどの学校で、児童生徒との触れ合いを重視し、教師や友人との関係を改善するための取組を行っている。
- ・意欲的に活動する場の設定や研修会、事例研究会を開催するなど、各学校の実情に合わせた取組を行っている。
- ・その他の取組としては、小学校では、「幼稚園・保育所、中学校との情報交換」や「定期的な情報交換会の実施」、「縦割り班活動」などを行っている。中学校では、「定期的な情報交換」や「Q-U等のアンケート実施による人間関係の把握」、「他機関との連携」などを行っている。
- ・家庭の理解が得られない場合、登校刺激のタイミング、担任以外の教職員の関わり方に指導の難しさを感じている学校が数多くあった。

3. 不登校増加・減少の理由

(1) 増加の理由

- ・不安など情緒的混乱。
- ・我慢できない。
- ・友人関係づくりが苦手。
- ・学力不振。
- ・母子分離不安。
- ・いわゆる中1ギャップにより、新しい環境に適應できない。
- ・家庭の教育力に問題がある。

(2) 減少の理由

- ・児童生徒には、日記などを通して担任とのつながりを段階的に密にし、保護者には専門機関と連携した働きかけを行った。
- ・学校を楽しいところにしてしようとする教職員の意識が高まった。
- ・「生活と学習の意識調査」を毎月実施し、児童生徒の悩みや問題点を把握して、早期に対応し、解決した。
- ・担任の指導により、学級の雰囲気良くなり、児童生徒同士がお互いに寛容になった。
- ・5月の連休明けや夏休み明けの不登校が増えそうな時期に行事を実施した。
- ・小中学校合同の行事を実施し、子ども、保護者、教職員の交流を行った。
- ・小学校と十分に連携を図り、その情報を先生方に周知した。
- ・スクールカウンセラー等の活用、関係機関との連携など、支援体制が整備された。
- ・特別支援学級との連携による対応を行った。
- ・市教育委員会の指導のもと、個別に支援プログラムを立て対応した。
- ・別室登校児童生徒に対する丁寧な対応を行った。
- ・保護者と担任が協力し、丁寧な対応を行った。
- ・保護者に、カウンセリングや教育相談等を勧めるなど、関係機関と連携した取組を行った。

4. 今後の各学校に求められる対応（○は、主に関わるべき教職員）

	管理職	学年職員	担任	養護教諭	教科担任	教育相談係	児童・生徒指導
人間関係づくりを意識した取組の継続			○				
家庭との綿密な連携			○				
「家庭の教育力の低下」への対応（※1）	○						○
児童生徒一人一人に目を配ったきめ細かな指導		○	○				
電話連絡による継続的な家庭との連携			○				
家庭訪問の実施による綿密な家庭との連携			○				
適応指導教室との連携			○			○	○
相談機関、医療機関との連携				○		○	○
児童生徒との触れ合いの場の設定			○				
意欲を持って活動する場の設定			○				
授業方法の改善工夫			○		○		
学業指導の充実			○		○		○
研修会、事例研究会の開催						○	○
幼・保、小、中、高の連携						○	○
3（2）減少の理由を参考にした取組の実践			○			○	○
全校体制で取り組むための教職員の意識の高揚（※2）	○	○	○	○	○	○	○
増加した理由についての分析	○						

（※1）子どもたちの成長のためには、家庭での教育が不可欠であることを、入学式、保護者会等で伝え、理解してもらうことが重要である。

（※2）不登校を未然に防止するための各学校からの回答では、「全校体制」「早期発見」「早期対応」「根気強く」「担任の力」「継続」「保護者との連携」「情報交換」「職員の意識」という言葉が目立った。つまり、これらが不登校対策のキーワードであることがわかる。特に、全校体制で取り組むための教職員の意識の高揚が重要である。